

明治期の料亭からにぎわいの拠点施設へ —日和山小幡楼—

酒田市 地域創生部 交流観光課 交流観光事業係

1 はじめに

山形県北部に位置する酒田市は、人口9万5,000人余(令和6年3月31日現在)の日本海に面した湊町である。古くから北前船の寄港地として栄え、大阪や京都との交易を通じてもたらされた料亭文化や上方文化が現在も至る所に息づいている。当時の酒田には、商人や北前船の船頭で毎夜賑わう料亭が数多く立ち並んでおり、その代表格ともいえるのが割烹小幡であった。

酒田港や市街地を一望できる日和山という小高い丘にあることから、かつて「瞰海楼^{かんかいろう}」と呼ばれ、往時の湊町・酒田を記憶する料亭建築である。

明治期から大正期にかけて建てられたこの旧料亭をリノベーションし、令和3年10月20日に酒田市日和山交流観光拠点施設(日和山小幡楼)が誕生した。

2 整備までの背景

明治9(1876)年に創業した割烹小幡は、100年以上の長きにわたり現役の料亭として地域に親しまれていたが、平成に入り全国的に老舗料亭が廃業していく中、平成10年に惜しまれつつ閉店する。その後、平成21年に米アカデミー賞外国語映画賞を受賞した映画『おくりびと』のロケ地となったことで再び脚光を浴び、建物の一部を観光客に開放していた。しかし、建物の老朽化が進行したため、平成26年3月に開放を終了し、取り壊しも真剣に検討される状態であった。

一方で、平成22年には市民有志による「旧小幡を保存活用する会」が発足するなど、利活用や保存を望む声も多くあった。平成24年には、所有者



撮影：Planet 写真事務所

写真1 酒田市日和山交流観光拠点施設(日和山小幡楼)

であった小幡家の「観光振興と歴史的建造物の保存に役立ててほしい」という意向により市に寄贈された。

その後、旧小幡の今後のあり方について、有識者による旧割烹小幡利用検討委員会での協議や市民ワークショップの実施などによって検討が重ねられた。「建物を再利用できるのか」「コストに見合う価値があるのか」などの課題がある中で、後に設計を行った高谷時彦氏に、保全の可能性や歴史的な価値について調査を依頼した。

3 調査で明らかになった旧小幡の歴史的価値

明治27(1894)年、庄内地震により広範囲に火災が発生したことで、酒田の中心部は壊滅的な被害を受けた。この火災によって割烹小幡も消失し、その後に再建されたと考えられていたが、本調査によって、火災を免れた貴重な建造物である可能性が高いことが判明した。それを裏付けるように、その後の改修工事で明治12(1879)年の棟札(建築の記録として梁などに取り付けられた木札)が和館2階か



写真2 明治38(1905)年日露戦争戦勝祝いの凱旋門
奥に割烹小幡が確認できる

ら発見された。また、当時の宿泊者には、皇族、榎本武揚、板垣退助らの名が記録されており、明治時代の要人が宿泊した施設がそのまま残っていることも判明した。

大正11(1922)年に「小幡洋食部」として開業した洋館は、東京の精養軒で修業したシェフが腕を振るった本格的なフレンチレストランである。

コンクリート建築の先駆けであると同時に、斬新なセセッション風(幾何学的な意匠による装飾が施された)デザインが採用され、当時の酒田ではそのモダンな外観が目を引く建物であったと推察される。さらに水回りには、東北地方ではほとんど発見されていない和製マジョリカタイル(凹凸の装飾が施されたタイル)が使用されているなど、学術的にも貴重な建築であることが明らかとなった。



写真3 大正期の割烹小幡洋館

4 「日和山小幡楼」への整備

この調査報告で歴史的な価値が証明されたことや、旧小幡が隣接する日和山公園が日本遺産の構成文化財¹として認定されたことから、日和山界隈の新たな拠点として整備していく方向性が定まった。

また、単なる施設の復元や保全ではなく、市民や観光客に利用される施設とするため「飲食を中心とした交流観光拠点」として以下の整備方針を掲げ、再生プロジェクトがスタートした。

1) 市民の憩いの場としての利用

市民の憩いの場である日和山公園の入口に位置するという立地条件を活かし、多くの市民から利用される施設とする。

2) 料亭文化の継承

明治の創業以来、小幡は割烹と西洋レストランとして飲食を楽しむ場所であった。今後の利用においても、食を楽しむ場所として再生を図る。

3) 眺望の場の復元

小幡は湊町・酒田のシンボル日和山の頂上に位置しており、海を見渡す眺めが売りの料亭である。その眺望は多くの市民に記憶されていることから、眺望の場としての復元を図る。

4) 景観資源の継承

料亭文化を体現する建物が、湊町として栄えた歴史・文化を伝える景観資源となっており、料亭としての盛期の外観を復元し継承する。

5) 文化財的価値の継承

先の調査結果で明らかとなった酒田湊の歴史を今に伝える貴重な文化財として継承する。

5 歴史的な価値を活かした改修

改修前の旧小幡は屋根や壁の剥落や床の腐食が多く見られるなど、老朽化が著しく進行しており、現存部分の活用方法や、建築物としての安全性の

1 日本遺産ポータルサイト「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落～」(平成29年)

<https://japan-heritage.bunka.go.jp/ja/stories/story039/>



写真4 改修前の旧小幡

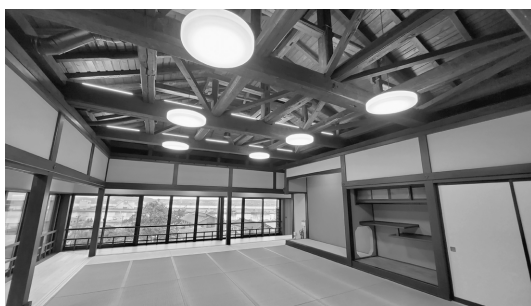


写真7 和館2階広々とした大広間の南座敷

確保などの課題があった。

前出の高谷時彦氏は、公共施設の建築設計を数多く手掛けており、歴史的建築の活用や都市デザインの分野でも多大な功績を残している。

整備にあたり、氏は「過去から来たものを敬意をもって受け止めたうえで、新しい価値をつけて将来に送り出す」と述べている。その言葉どおり、改修にあたっては、歴史的建築物としての価値を丁寧に紐解きながら、現代の建築技術を取り入れリノベーションが行われた。

1) 和館1階：町家構造を活かしたカフェ空間

和館1階は、度重なる増築によって複雑な料亭建築となっていたが、付加された部分を取り除くことで、「みせの間」「通り庭(土間)」などといった酒田町家の特徴である構造が浮かび上がった。

エントランス部分にその土間を活用することで、高い吹抜けと梁組が、訪れた人に往時の趣を感じさせる造りとした。旧料亭で厨房として使われていた窓際は、港の見えるカウンター席を設置し明るいテラス的なカフェスペースとした。



写真5 ベーカリーが入るエントランス



写真6 港を望むカフェスペース

2) 和館2階：大広間を活かした市民の憩いのスペース

和館2階は、酒田で最も広かったといわれる旧料亭の大広間を復元することで、自由に休憩できる広々としたスペースに生まれ変わった。

長年の漏水で老朽化した天井を取り払い、柱や梁などを露出させる「^{あらわ}現し天井」とすることで、南座敷(和小屋)と北座敷(洋小屋)で屋根を支える骨組みが異なるという珍しい構造や、増築の跡から小幡の歴史を感じてもらうことができる。

市民の記憶に残る当時の「瞰海楼」のイメージは、屋根と霧除け庇が重なり、その下部に欄干付きの縁が巡っているという二層の姿である。その印象的な姿を再現するため、縁の著しい沈下を補正して再構築するとともに、往時の姿とかけ離れたアルミサッシ等を取り除いて、欄干や障子を復元させた。

3) 洋館：大正ロマンの風情を再現した飲食スペース

洋館は、進取の気風に富んだ往時の大正建築の

雰囲気や踏襲して、モダンな外観を再生するリノベーションを行った。地階、1階、2階からなる三層構造であったが、耐震壁によって閉鎖的になってしまう地階と、比較的



写真8 明治中期 市街地の屋根越しに見える割烹小幡



写真9 現在の日和山小幡楼和館

撮影：Planet 写真事務所

大きな窓を持つ1階とを、1階の床を撤去し吹抜けとすることで、上方の窓から光が差し込む天井高6.5mの開放的なレストランススペースとした。壁面にはセセッションをイメージした照明器具を配置し、旧小幡の水回りに使用されていた和製マジョリカタイルを壁付照明器具の一部に活かすことで、往時のスタイルを再現している。

6 施設概要

施設の運営方法は指定管理者制度を採用した。市民の憩いの場としてのフリースペースである交流エリア(和館2階・洋館2階)と、長期かつ独占的な使用を認める飲食物販エリア(和館1階・洋館地階)が両立するように、公募によって事業者を選定した。

愛称については、長年市民に親しまれた「小幡」の名を継承するとともに、かつて「瞰海楼」と称されたことから「日和山小幡楼」と定めた。

現在、和館1階はカフェ及びベーカリーとして

営業しており、焼き立てのパンやハンバーガー、ドリンク等が提供されているほか、セレクトショップスペースでは地元銘品の販売を行っている。

和館2階の南・北座敷及び洋館2階展望プレイスは、市民や観光客が自由に利用できる休憩スペースでありながら、予約をすれば貸室利用も可能であるため、各種講演会や展示会のほか、各種市民団体の集いの場として広く利用されている。

洋館地階は、大正時代に西洋文化をいち早く取り入れた「小幡洋食部」の気風を受け継ぐレストランとして、地元の食材を使用したパスタのコースやスイーツなどを提供している。

7 現在の利用状況と今後の展望

令和3年のオープン以来、日和山小幡楼の来館者数は年々増加しており、市内外から多くの方に訪れていただいている。指定管理者によるSNSでの情報発信や冬期間のイルミネーション実施などの創意工夫の効果もあり、若い世代のカフェ利用が多い一方で、高齢者層の日常使いとしても広く利用され、来館された90代の女性からは料亭時代の割烹小幡で結婚式を挙げたことを懐かしむ声も聞かれた。

このように、日和山周辺には北前船で栄えた酒田の歴史を色濃く残す建物が多く現存し、隣接する日和山公園は長年市民に親しまれてきた。今後も市民の憩いの場であるとともに、湊町・酒田を現在に紡ぐ本市の観光拠点として、日和山周辺の観光客の周遊促進につなげていきたい。



写真10 日和山小幡楼洋館：開放的なレストランススペース